

続 てんりゅう
暮らしの見本帖

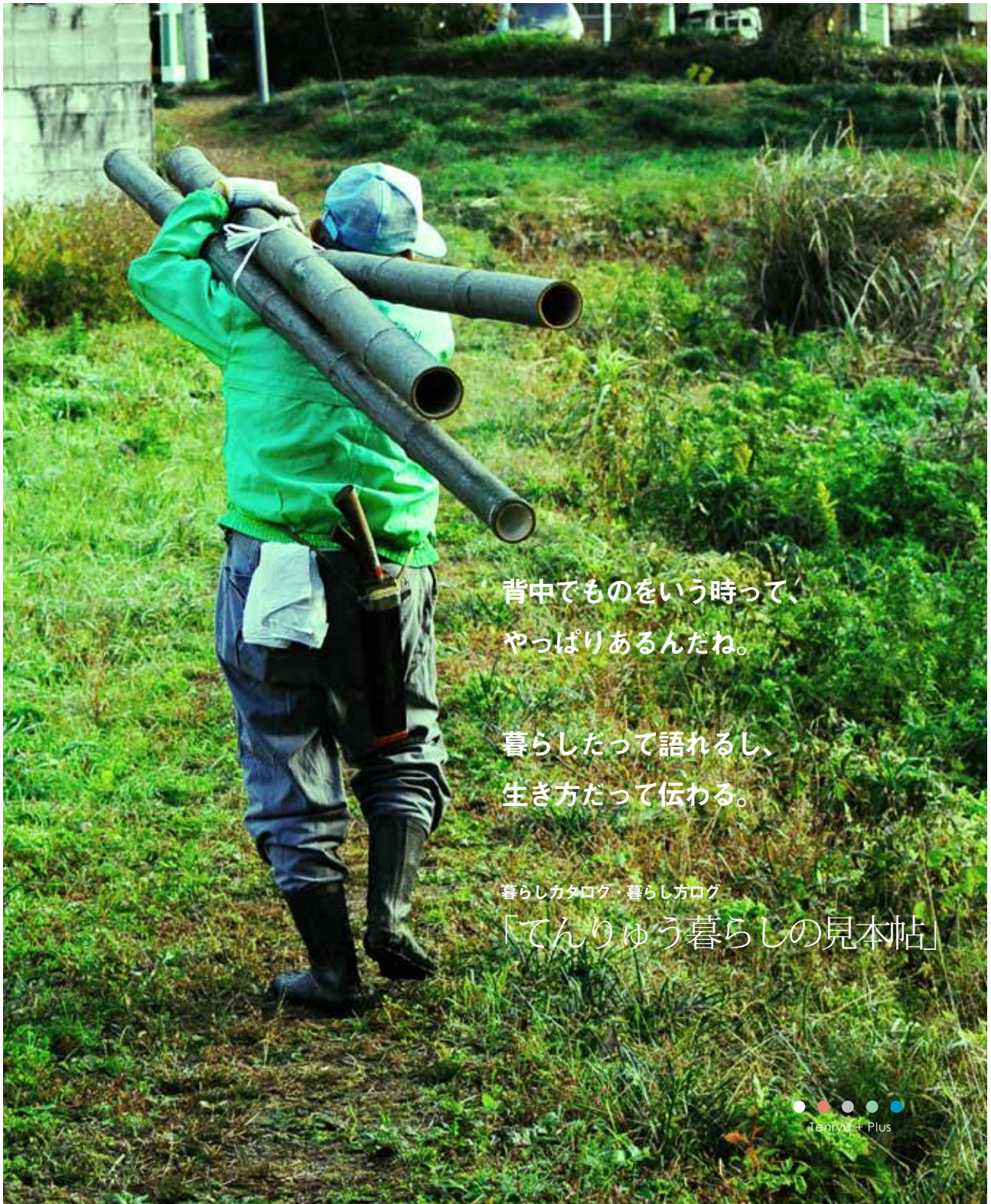
竹とともにある暮らしのインタビュー



てんりゅうプラス



Tenryu Ward, Hamamatsu city,
Japan



背中でものをいう時って、
やっぱりあるんだね。

暮らしだって語れるし、
生き方だって伝わる。

暮らしカタログ・暮らし方ログ

「てんりゅう暮らしの見本帖」

Tenryu + Plus



homepage



youtube



暮らしが見える。感じる体温。^{ぬくもり}

てんりゅうプラス



暮らしが見える。感じる体温。^{ぬくもり}

Tenryu + Plus

浜松市天竜区

てんりゅう

続 てんりゅう 暮らしの見本帖

竹とともにある暮らしのインタビュー



contents

てんりゅう暮らしの小実験

- 05 私たちの仮説
- 06 小実験「ブラック Box」の中

暮らしのインタビュー

- 08 竹灯笼を灯す人
- 10 竹の家に集まる人たち
- 12 竹籠を編む人
- 14 筍を握る人
- 16 手作りのお守りを贈る人
- 18 やな漁をする人
- 20 巨大な竜を曳く人たち
- 22 ごみを資源に変えてしまう人
- 24 山の竹を砂丘まで届ける人たち
- 26 門松を建てる人たち

28 竹取物語の今。 A story of Tenryu + plus

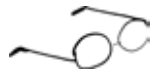


続・てんりゅう暮らしの見本帖
「竹とともにある暮らしのインタビュー」

浜松市天竜区役所
〒431-3392
浜松市天竜区二俣町二俣 481 番地
☎ 053-922-0013
E-mail:tn-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp

HP 検索「てんりゅう暮らしの見本帖」

てんりゅう暮らしの小実験



全国各地で広がり続ける「放置竹林」。

景観の悪化や他の植物や野生動物への影響、土砂災害の危険性の増加など、さまざまな問題を引き起こす要因として懸念されています。

天竜区においても、放置竹林対策は地域の課題の一つであることから、今回、住民の皆さんたちの力を借りながら、解決の糸口を見つけようという実験を行いました。

題して「てんりゅう暮らしの小実験」。果たしてその結果は？



私たちの仮説

竹

(放置竹林)



ブラック
BOX

(触媒)



野菜

(必要なもの)

暮らしの知恵
人々の力

私たちは、地域の課題となっている放置竹林の竹を「資源」と捉え、これを必要なものに変えられる方法を考えてみました。そのための「装置」を動かす仕組みは、天竜区内に住む人たちの暮らしの知恵と、これに協力してくれる人々の力。我々の仮説どおりにいけば、竹から野菜が生まれるはずです。



暮らしの実証実験

仮説「竹⇒野菜」は、成り立つか？

step01

夏

放置竹林の伐採

（竹林ボランティア「タケのネ」）

天竜区龍山町白倉地内の放置竹林で伐採作業をスタート。白倉地区は、区内の他の地区同様、高齢化などにより、管理が行き届かなくなった竹林が広がり始めていました。

今回は、竹林ボランティアとして同町内で活動をしている「タケのネ」の皆さんが、竹林整備する機会に合わせて、竹の提供を協力を依頼。この日は、市内外から10人が参加し、作業に汗を流しました。整備前には暗かった竹やぶも、みるみる日が差し込み全く別の景色に。堆肥の原料として、軽トラック1杯分の竹を譲り受けました。

step02

秋

竹チップづくり

（浜松市フルーツパーク、天竜区役所職員）

「タケのネ」の皆さんから、竹のバトンを預かって、およそ1カ月が経過。竹がある程度乾燥した頃合いを見計らって、天竜区役所の職員の手で、竹の破碎（竹チップづくり）を行いました。

木材などと比べて、繊維が強くチップにするのが難しい竹。今回は、竹専用の破碎機を所有している浜松市フルーツパークまで竹を持ち込み、作業を実施しました。破碎機を通った竹は「バキバキバキ」という音とともに、勢いよくチップ状に。余った竹の一部を使って、区役所窓口用のペン皿も試作品として作りました。





step03

冬

竹の堆肥化

(エコピュア佐久間)

チップ状になった竹を持って、一路、天竜区佐久間町浦川へ。この地区で20年にわたって、家庭の生ごみ堆肥化活動に取り組んでいる市民団体「エコピュア佐久間」の皆さんに竹チップを託しました。

粉末状であれば、分解が早い竹ですが、今回は、やや荒めの竹チップ。堆肥化を促すボカシと竹チップを直接、畑の土に混ぜ込み、同時に野菜の種も蒔きました。後は、ゆつくりと自然に返ることを願って冬の間、待つだけ。「ぎっと大丈夫。ちゃんと堆肥になって、春になったら、野菜ができますよ」との声に励まされました。

step04

春

竹が野菜を育てる土に！

(天竜区の大池・太陽・風・土)

夏の終わりから始まった天竜区をフィールドにしたこの実験。龍山町の竹林から切り出した竹は、形を変えながら浜松市フルーツパーク、佐久間町を経て土（堆肥）となり、見事、野菜を育てる栄養分となりました。

「放置竹林」と呼ばれ、悪者のように呼ばれる竹は、使い方次第で、資源として活用できます。もちろん、今回の実験でいえば区民の皆さんの知恵や協力があったこそ。この他にも、天竜区では竹を活用した生活の知恵がたくさんあります。これについては、次ページからの暮らしのインタビューにてご紹介します。

③ 「タケのネ」と「エコピュア佐久間」の皆さんの詳しい活動は、本書の「暮らしのインタビュー」でご紹介します。



今、全国各地で問題視されていることがある。

— 放置竹林。

高齢化などが原因で、管理できる人がいなくなり、整備が行き届かないまま放置されてしまった竹林である。ここ天竜区でも大きな問題の一つとなっている。

天竜区龍山町には、放置竹林の整備に取り組む団体がある。その名も「タケのネ」。地域の竹林整備と伐採した竹の有効活用などを行っている。

この場所で何ができるか

「タケのネ」を主宰するのは、浜松山里いきいき応援隊として龍山町で活動する堀田侑子さんである。「最初に龍山に来たときに『このまちで困っていることは何だろう』ということと『この場所で自分に何ができるか』を考えたとき、竹」というキーワードが見えてきたんです。「これだ!」と思ったんですね」堀田さんは、活動のきっかけをこう語る。龍山へ来る以前から、竹林整備の経験があったという。

活動を始めるにあたっては、知り合いや地域の人など様々な人に声を掛けた。「タケのネ」の活動は、ボランティアを募り、月1回のペースで行っている。1回あたりの参加者は6、7人だという。

「初めに集まったのは、竹林整備の経験が無い人がほとんどだったので、知り合いの林業に携わっている人を講師に招いて講習会を開催しました」。その講習会の開催地には、地域の人

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

和室にかっこよく飾って置ける。
そんな竹灯籠を作りたいですね。

と関わることをできる場所を選定しているという。中には、地域のひとのふれあいを楽しみに参加している人もいるそうだ。「参加者の思いも様々です。竹林整備をしようというだけでなく、地域のひととの関わりを楽しみにしている人、困っている人の力になりたいという志を持っている人、講習会の後の宴会を楽しみにしている人もいます。じゃないですかね」堀田さんはそう言って笑った。この話を聞くだけでも「タケのネ」の活動が単なる竹林整備というだけでなく、地域との関わりを大切にしているものであることが伝わってくる。

地域を照らす竹

次に堀田さんが考えたのは、竹林整備で切った竹の使い道だ。堀田さんは「竹灯籠」に一筋の光を見出した。竹で灯籠を作り、龍山をもっと明るくする明かりを灯したい。そんな思いが生まれた。以前も竹を活用した物づくりをしたことはあったが「竹灯籠」を作ったのは初めてだという。「竹灯籠にはうれしい反響がありました。竹灯籠づくりのワークショップを開いて欲しいと、いろんなところから依頼をもらったんです」。地域内のみならず区外からも依頼があり、対応しきれないこともあったほど。さらに、東京や栃木など県外からも販売してほしいという声をもらった。「日本に住む外国人の方から『こんなデザインのものが欲しい』という注文を受けたこともあった。これからもっと広がってほしいなと思います」

竹灯籠については、課題だと感じていることがあるという。「イベントで竹灯籠を展示していたことがあったんですが、乾燥のせいか、割れてしまったことがあるんですよ」

竹は乾燥に弱い。この課題をクリアしなければ、商品としての価値を上げることは難しい。そう思った堀田さんは「タケのネ」のメンバーで京都まで研究に向いたそうさだ。「竹が割れないようにするために竹を火であぶる処理があるんですが、その作業を見せたらびっくりです。職人技でしたね。ただ、その域まで至るには職人修行をしなければいけませんからね」と堀田さんは苦笑いした。

それでも「和室にかっこよく飾って置けるような竹灯籠を作りたい」と今後の目標を話す。放置竹林という厄介者が立派な竹灯籠として生まれ変わる。部屋の中を温かな灯籠の明かりが包み込む。とても魅力的である。

灯された明かりが広がる

現在は、竹灯籠以外にも活用を模索している。竹を使ったアクセサリー作りをしたり、流しそうめんを台から組み立てるワークショップを開催したりしてきた。ただ、これらの活動は、龍山で行うということに意味を感じているそうさだ。「例えば、流しそうめんなんかは『楽しかったね』というだけで終わってしまっただけじゃないなと思うんです。実際に龍山で竹林のことを知ってもらって、その上で体験してもらおうと

うことですよね」と堀田さんは話す。そして続ける。「タケのネ」の活動としてだけで終わるんじゃなくて、地域の人も巻き込んでワークショップを開催したいと思っているんです。地元のお母さんにごはんを作ってもらったり、竹の工作ができる地元のお父さんが顔を出してくれたりしたこともありますし」。この活動が、地域のひとのふれあいの場にもなっていて欲しいとの願いが、その言葉に込められていた。

――放置竹林。

この問題に取り組むために人々は、様々な方法を模索している。「タケのネ」もその一つ。「タケのネ」の進む道は、竹灯籠の明かりで照らされている。今はまだ、ぼんやりとした明かりでも、それは、やがて地域を温かく包み込む光の輪に広がっていくことだろう。

そんなことを期待して止まない。



竹に集まる

竹細工。プラスチックなどで作られる工業製品にはない温かみがある。その理由は、竹という素材はもちろん、人の手で作られた過程にあるのではないだろうか。その魅力を探るため、竹籠や竹ざるなどを作る人たちが集まるという場所を訪れた。その名も「竹の家」。何ともわかりやすい名前である。

毎週木曜は、週に一度の竹の家の日。建物内に入ると、広さおよそ20畳のスペースに15人ほどが作業をしていた。鉋で竹を削る人、ナイフで竹ひごを削る人、やすりをかける人と、その仕事の内容はさまざまだ。「ここではみんな、自分の好きなものを作るんですよ」と話してくれたのは、竹の家で指導役を務める石岡さん。84歳になるそうだが、背筋がすっと伸び、ジーンズがよく似合う。みんなは石岡さんを「先生」と呼び慕っていた。「25年ほど前に、人の紹介でここに来るようになったんです。ちょうど定年を迎える頃だね。元々、中心になっていた地元の人から、数年前、指導員として引き継いでほしいといわれて、今にいたるんですよ」と石岡さんは話してくれた。実は、石岡さんは地元の人ではなく、天竜区の隣、浜北区の人だ。「建物の管理人こそ、地元の人がしてくれていますけど、ここに来る人は、天竜区外の人が多いけど。中には車で2時間以上かけて通う人もいますよ」と石岡さん。少し意外だっ

たが「竹」が一つのきっかけで、天竜区の山の中に人が集まっていることが面白い。しかも、週一回と定期的に。竹の家は、いつ頃から地域間交流の拠点施設になっていったのだ。

共有空間、共有ツール

竹の家を訪れる人は、仕事をリタイアした男性が中心だが、最近は女性も増えている。石岡さんに話を聞いている最中も、作業するさまざまな音に混じって、女性たちを中心に会話が弾む。「一人でやっても楽しくないですよ。ワイワイやるのがいい」と石岡さん。作るものは別々でも、空間はしっかりと共有されている。「木曜日が来るのが楽しみ」とみんなが口を揃えていることから、この場所の大切さが分かる。ある男性が「家にいると奥さんに煙たがられるから、ここに来るんだよ」というと、作業場が笑いに包まれた。この雰囲気は何ともいえずよい。ここで使われる竹は、道向かいの竹やぶから調達している。このことは、もちろん地元の人でも承済み。竹林の手入れは手間がかかるので、お互いにとってよい。竹とひと口にいつても、淡竹、孟宗、真竹など種類はいろいろ。「種類によって用途が違うんですよ」と石岡さんは教えてくれた。籠などの竹を曲げて作るものは淡竹。表面が白くて、粘りがあるのが特徴だ。しゃもじのように一枚で大きいものを作るなら孟宗。真竹は、節の間

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

が長く緑色が強い。そう意識して窓の向こうの竹やぶを眺めたが、違いがよく分からない。石岡さんに「いつも見ていれば分かりますよ」と笑われた。もっと勉強しなければと、恥ずかしくなった。それぞれに作業を進めているが、どこにも設計図のようなものはない。「編み方の規則性さえ覚えれば、自分で好きなものが作れるようになるよ」と竹ひごを組みながら、ある男性は教えてくれた。石岡さんは「先生」と呼ばれているが、石岡さんは「ここにいるみんな先生みたいなもの」だと笑う。「時間をかけて作るから、なまじプロより丁寧な仕事をしますよ」。

プロ並みの作品づくりを支えているのが、石岡さん考案の道具「幅決め」だ。この道具は、その名のとおり竹を均一な幅にスライスするもの。正式な名前はないが、いつの間にかこの名前が仲間内で定着した。竹細工には、同じ幅、同じ薄さの竹ひごが何本も必要となるが、ナイフだけで作るのは至難の業。しかし、この幅決めを使えば、簡単に精度が高いひごが作れるそうだ。石岡さんは「プロ並みの精度が出ますよ」と胸を張った。作業場の向こうから「ここにしかない道具。すごいでしょ」との声。幅決めで竹を引いていた女性たちも、それを聞いて大きくうなずいた。良い仕事に、良い道具は不可欠。まさに幅決めは、その極めてつけともいえる道具だ。

その魅力、人の手にあり

馴れた手つきで作業をしている人たちを見ながら「最初はみんな素人だったんですよ」と石岡さんに尋ねる。頷きながら石岡さんは、丸くてかわいらしい籠を指差した。「一番初めは、だ

ここにいるみんなが先生。
なまじプロより丁寧な仕事をしますよ。

「いたいこの一輪挿しを作るんです」。一見、簡単そうな作りに見えないが、使われている竹ひごは10本。一日で出来上がるから、みんな喜んで帰るそうだ。確かにこんな立派なものが自分の手で作れたら、その楽しさにのめり込むのも納得できる。話を聞きながら、おそろくみんな、まずは玄閑に一輪挿しを飾るんだろうと勝手に想像した。

石岡さんが「こんなものも作っているんですよ」と横笛を見せてくれた。「野口町（中区）などから、浜松まつりに使う笛を頼まれてね」。その数はこれまで50本以上。もちろん材料は、竹の家の近くのやぶから取ってきたものだ。竹を取って、乾燥させるところから塗りまで、すべて石岡さんの手作業。完成までは1年かかる。その手間隙と仕事の細やかさはもちろんだが、天竜区の竹が、浜松まつりを賑わす祭囃子の道具になっているとは知らず驚いた。こんな形でも竹は、地域と地域を繋ぐ役目を果たしていた。手間をかけて作られたそれぞれの作品は、自分で使うことよりも、人に譲ることが多いそうだ。「人に喜んでもらうことが、一つの楽しみ」だと口にする人がほとんどだった。何事も「誰かのため」というのは、大きなモチベーションになるものだ。そして、その気持ちは籠のごとく編み込まれ、あるいは丁寧に磨きこまれるのだから、当然、物そのものに温かみが宿る。やはり「竹細工の魅力は人の手にあり」。これで間違いない。





年月を重ねて 使い込まれた職人の手

大きくて立派な手をしている。初めて梅沢さんにお会いした時、自然と目が、その手元に魅きつけられた。この手からいろいろな竹細工が作り出されるのだ。誰もが納得する職人の手をしている。最初は、職人氣質で気難しい人ではないかといささか不安に思ったが、とても丁寧にやさしい口調でお話をしてくれた。

「小学校の時からかな。きつかけは、脚の怪我」小学校6年生の時、転落事故で片足を失った。その後、父親の勧めで座り仕事でもできる竹細工を始めたという。今年で84歳。「70年以上にもなるねえ」と、その年月の長さをまるで他人事のようにさらりと答えた。

当時は、1日10時間ほど働いていて、朝、日が出て明るくなると始め、夕方、日が暮れて暗くなると終わり。電気の利用が一般的ではない時代だったから、お日様とともに仕事をしてきた、と。

そのころは、どんなものを作っていたのか聞いてみた。

「今じゃあ、プラスチック製品ばかり」。昔は生活の中で必要な物すべてが竹で作れた、と淡々と語る梅沢さん。籠やら箕やら需要があったから、よく売れたなあとお話を思い返した。箕は1日に3個。びくなら1日に2個半。それぐらいが標準的な作業時間だという。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

生活の中で必要なものは、
昔はすべて、竹で作っていたんです。

広がるロコミ 遠い道のり

今、私たちの生活の中にあふれている日用雑貨は、なんにしてもプラスチック製が多い。籠、ざる、ボウル等々、雑貨が揃う百貨ショップに行けば、それは顕著にわかるだろう。

しかし、こんな時代だからこそ、竹細工の良さに魅かれている人も多いようだ。

「ロコミで知ってもらえて、教えてほしいとか見せてほしいとか、連絡はよくもらいますね。でも、なかなかここまで上がってくる人は少ない」ちょっと残念そうに梅沢さんはつぶやいた。

そう、梅沢さんの自宅は、市境にほど近い春野町川上地区にあり、その地名も外山。春野協働センターから車でおおよそ50分。標高は600メートルほどあるそうだ。この冬、ここでは毎日、氷が張っているという。午後に訪れたこの日も、平地より空気が冷たく感じられた。

通院などで浜松の街中へは、定期的に行くそうだが、買わずとも夫婦二人分ぐらいは、自分たちが育てた野菜で、十分、間に合わせられるそうだ。「だからやせ細っちゃうんだ。肉もたまには食べないと」と梅沢さんはおどける。

弟子の存在

そんな中で、弟子の話を始めると梅沢さんは相好を崩した。最近、春野町に移住し

てきた女性3人が、竹細工を教わりに通ってくるという。一番弟子が作った工房の紹介看板に指を差しながら弟子たちのことを話す梅沢さん。その存在をうれしく思い、また、頼りにしているということがひしひしと伝わってくる。彼女たちがあれをして、これをして、口も滑らかだ。

手品のような早わざ 持ち続ける向上心

三輪バイクに乗る梅沢さんに先導され、工房へ向かう。茶工場兼用だという家屋に入ると、作りかけの竹細工があった。材料となる竹は、春野町内の竹林から、知り合いが切り出して運んでくれるという。自宅近くの竹林はイノシシやシカが荒らしてしまい、今では、使えなくなってしまうそうだ。

「アイデアが浮かぶまでしばらく放っておくんです」と梅沢さん。作りかけのものを見やって何気なく言った言葉だ。知っている編み方や型のものを作るだけでなく、新たな編み方やデザインを本で勉強し採り入れているという。

せっかくなので、編んでいるところを見せてほしいとお願いした。梅沢さんはひよいっと座り込み、パツパツと左右の手

を動かす。あっという間に編み目が増えていく。わずか十秒ほどのうちに、元あった物が別の物のように変化していく。まるで手品みたいだ。「こんな感じ」何事もなかったかのように、梅沢さんはすっと立ち上がった。

職人の気構え

さて、ひと通り、竹細工についての話は伺った。弟子に限らず、いろいろな人に自分の技術を教えることをいとわない姿勢。いくつになっても新しい技術を取り入れようとする向上心には、頭が下がる。

そして、話は尽きない。飾ってある作品を横目に、在来種を残したいという思いや肥料のやり方。奥さんが作っている地こんにゃくのこと。ヤマビルなんて気にしていたら、山仕事なんてでんんということ…。竹細工以外のことにも一家言ある。

「手」が職人だと示すわけではなかったんだ。そう気づかされる。その人の「心」のあり方が、職人だということの必要不可欠な要素なのだ。



竹やぶの心地よさ

まだ肌寒い2月初旬。「筍はもう少し先かな」など思っていたのだが、すでに早いところでは筍がはじめているという情報が入った。これはぜひ取材したいと思ひ、筍を育てている人を紹介してもらい、訪ねることにした。春の食材のイメージが強い筍。地中は、春の準備が始まっているのだろうか。寒い2月とはいっても、節分も過ぎて二十四節気では立春だ。この2月の筍の話聞いて、古くから使われている二十四節気が、日本人の暮らしに即したものであると、改めて感じさせられた。

天竜区只来のとある竹やぶで待ち合わせ。私たちを待っていてくれたのは、中谷さんというお父さんだ。軽トラックに帽子、腰には地元の人たちが「ぼら」と呼ぶ籠を提げていた。優しい笑顔で迎えてくれた中谷さん。実は「蜂の巣取り名人」としても地元では知られている。

「この竹やぶは、近所の人のものなんですよ。数年前まで荒れ放題でね」と中谷さんは、ここで筍を採るようになった経緯を話し始めた。手入れが出来なくなったやぶを、持ち主に代わって整備するようにになったことがきっかけ。いのしの住み家だったというやぶは、今では陽の光が差し込み、人が自由に歩き回ることが出来るまでになった。竹やぶ全体は、切り出した竹で作られた柵で囲まれているが、これは中谷さんが一人で手掛

けたそう。だ。「ちゃんと作らないとウリ坊が隙間から入っちゃう。手間をかけるきゃ、筍も自分の口には入らない」と苦笑いした。

それにしても、これだけの柵を作るのは骨の折れる作業だろう。「一気に何十本も切った後に、肩が痛くなって接骨院に行ったら『あんだ、何やったんだね。重いものでも提げたの?』とすぐに見抜かれた。それから、少しずつやるようにしてるんだけど」と中谷さんは笑った。

竹やぶに足を踏み入れると、ふかふかとした感触。視覚的には日本の「和」を感じさせる風景だ。きっちり手入れされた竹やぶが、これほど心地よい空間であるとは正直知らなかった。「笹がじゅうたんみたいでいいですよ。たまに孫が遊びに来るけど、小さい子でも安心して遊べるよね」と中谷さんは優しく目尻を下げた。こんな場所で自由に駆け回ることができたら、子どもたちは楽しいだろうな、とつらやましい気持ちになった。

春の宝探し

筍掘りといえば、地表から少し顔を出したものを掘り出すイメージだったが、2月の筍探しは、足の裏の感覚に頼るといふ。「3〜4ミリの小石を踏んだ感覚。その感じを探してみてください」と中谷さん。ふかふかとしたやぶの中を慎重に歩いて回るが、なかなか手応えならぬ、足応えがない。何だか、小さい頃にプー

暮らしか見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

ルでやった「宝探しゲーム」をしているような懐かしい気分だ。「ここ、ここ。ちょっと踏んでみて」。私が、なかなかお宝にありつけないのにしびれを切らした中谷さんから、ヒントが出され、やっと、その感覚。にたどり着いた。「えっ」と思わず、声を出してしまうほど、わずかな感覚。「この感覚を探して回るわけです」と中谷さんはにんまりとした。その場所の笹と土をよけると、親指の先ほどの筍が顔を出した。中谷さんの小石という表現は、決して大げさなものではなかった。

よく見ると竹やぶには、何本も木の串が刺してあった。これは、中谷さんが筍を見つけた場所に目印として立てたものだ。その数は100本ほど。1月下旬にやぶに入ると、筍が一気に始めていることに気がついたそう。今年のは、暖かったからかな。例年よりも早い」と中谷さん。「でも、実は、筍は8月くらいから土の中で成長し始めるんだよ」と教えてくれた。早い時期の筍は、まさにイノシシとの競争。「人間は勝手に入って筍を掘っていくようなことはないけど、シシは別。勝手に採っちゃいかんって、ほんとシシに言っただけだよ」と大きな声で笑った。

「ちょっと見てごらん」と案内されて後をついていくと、中谷さんが作った竹の柵の向こう側は、イノシシが土を掘り返してひどい有り様だった。「ここは、川が近くて土がいいから、いい筍ができる。イノシシは川も渡るし、鼻も利くから」と中谷さんは説明してくれた。それを見て、手間をかけてでも柵を作る理由がよく分かった。

田舎暮らしのオールラウンダー

中谷さんがつるはしで土を掘り始めると、黄色

この時期の筍は黄色い。
勝手に「黄金の筍」と名付けたんですよ。

い筍が出てきた。ここで採れる筍は、ほとんど人に配ってしまうそうだが、その色に驚く人が多いという。「筍の皮はこげ茶とか黒だと思っている人が多いからね。だから、スーパースーパーのものとは品種が違うのかと聞かれることもある。僕のは、陽に当たる前に採るから黄色い。だから勝手に「黄金の筍」と名付けてるんですよ」と中谷さんは、筍を手になりにこりとした。筍はアク抜きが面倒なイメージがあるが、この時期のものは湯がかずに食べる方が香りが立つそうだ。「味噌汁に入れると一番違いが分かる。茹でたらうまくない」。竹冠に匂と書くたけのこは、まさに春の香り、匂の味だ。これ以上の贅沢はない。

筍のほかにも、タラの芽を作ったり、川で釣りをしたりと何でもできる中谷さん。今年も地元の自治会長も務めた。また、名人といわれる蜂の巣取り歴は35年以上。暮らしにおいて、広い守備範囲を誇るが、いずれも自分なりのやり方を熱心に研究している。「やってるうちに自然に気づくことがある。日々、勉強です」という言葉は、中谷さんの生き方そのものだ。中谷さんのような人に会えると、田舎の人たちのオールラウンドかつマルチプレイヤー的な暮らしが格好よく映る。次に会うときは、とても珍しいというオオスズメバチの巣の写真のことや、6月まで採れ続けるという魔法のタラの木の話もじっくり聞きたい。どの話もきくと一級品で面白いはずだ。



それは、子どもたちの あいさつから

「いつてきます！」そのひと声が、私をそんな気持ちにさせたんです。そう語るのには、天竜警察署水窪担当次長の木庭さん。3年前に、ここ水窪に赴任して以来、毎年、新一年生たちに手作りの「お守り」を贈っています。

その「お守り」は、

今、カエル
直ぐ、カエル
無事、カエル
安心して、寝ころカエル
そして、今年も、元気カエル

ここは、天竜区水窪町奥領家の天竜警察署水窪分庁舎。玄関の扉を開けると、「こんにちば」と、あたたかな笑顔で出迎えてくれた木庭さんが。
一瞬にして、なんだかやわらかく包み込まれたような、そんな感じ。ふとカウンターに目を移すと、カエルもお出迎えてきています。

「まんじしかない」と 「どっこいでもある」

地域のみなさんが地域の放置竹林を伐採した、その竹。これをいただいて作っているんです。

作る理由ですか？

地域に何か恩返しをしたくてね。だって、こんなに気持ちのいいあいさつをしてくれるこの地域が、この子どもたちが、私は一瞬で大好きになっちゃいましたから。

他にはないでしょ、こんなに元気のいいあいさつをする子どもたち。地域の宝ですよ。

竹ですか？

どこにでもあるじゃないですが、ここには。地域が誇るべき素材ですよ。

そんな木庭さんの言葉に、最初は戸惑いを覚えました。なぜって、この地域に生まれ育った私たちには、当然、子どもたちはいつも元気がいいもので、それから、竹というものは放っておけばどんどん増えていくやっかいもの…。でも、木庭さんは言うのです。

宝であり、誇るべきものである、と。

何でもない普通のことだが、実は、とてもステキなこと。そんなことって、ここで暮らす私たちの周りにはいっぱいあふれているのかもしれない…。そう、気づかされるのです。

ヒントは、地域の先人たち

水窪に赴任したころ、あるお店に行っ

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

たら、竹で作ったいろいろな顔が飾ってありましてね、これをヒントにしたんです。聞くと、近所の人たちが作ったものだ。これは！って、思いましたね。

そう木庭さんは語り始めました。

子どものころから工作が好きで、プラモデルをよく作りました。今では、木工や竹細工が趣味のひとつ。ぬくもりを感じるし匂いもいいし。作っている間、ああでもないこうでもない、いろいろと考えることができて本当に楽しいです。時間が経つのも忘れちゃいますね。

木庭さんの生活の中の、欠かせないひとコマ。それがこの「お守り」づくりのようです。

笑顔は続きます。

竹を細かく切っていくながら、完成を思い浮かべ組み立てていくんです。ここは頭の部分にしよう、よし、ここは腕にしてみよう、いや、足の方がいいかな…。と。大きさは太さ、節の具合など、竹といっても同じものはひとつもないですからね。

お守りを手に、木庭さんは続けます。

そう、ひとつ完成するのに1時間くらいかかるかな。あっ、測ったことはないけどね。苦労することですか？そうですね、接続部分は気を遣いますね。うまくいかないこともあるけど、でも、不思議となんとかなるもんで

気持ちのいいあいさつと笑顔。
一瞬でこのまちが好きになりました。

すよ。これまでいくつ作ったかな…数えきれないね。

たくさんのお守りが、ここ水窪で生まれました。

浜松市は「楽器のまち」でしょ。ですから、バイオリンを弾いていたり、ドラムをたたいていたり、完成した結果、カエルの、音楽家が多いんですよ。

職場の玄関近くや、地域の商店に飾っておくんです。皆さん、必ず声を掛けてくれるんですよ。会話も弾んで明るい雰囲気になりますね。

願いは、地域いっぱいの笑顔

チャームポイントですか、わかります？（お守りをいくつも並べて）ほら、どれも笑っているでしょ。みんな笑顔なんです。でも、笑顔といつてもやっぱり同じ顔はひとつありません。

ほんと、みんな笑っていますね。見つめられると、いつの間にかほほが緩んでしまいます。

子どもたちがいつも笑顔で元気いっばいで過ごしてほしいと願いを込めているんです。やっぱり、子どもの元気な声が響くと地域が明るくなりますよな。

子どもたちの登校時間に横断歩道で交通安全指導をするんですが、やっぱり、元気なあいさつは気持ちがいいですね。これは、この地域で受け継がれてきたもの。地域の人々のつながり、ぬくもりを感じますね。

贈り続ける、意味

この間ね、2年生に会ったんです。このお守りの話をしたら、「机に飾ってあるよ」と返事が。うれしかったなあ。

水窪小学校の無事故記録は1000日を超えました。

これからも子どもたちが「無事帰る」ように、私も地域のみなさんとともに見守っていきたいと思っています。このお守りが、少しでも地域の安全と笑顔に役立てられたら。

木庭さんは目を細めます。

子どもたちにはこのまま素直にまっすぐに、大きくなって行って欲しい。

この3月で、定年退職を迎える木庭さん。でも、地域への想いはまったく変わりません。

「もちろん、今春の新一年生にも、渡す準備はできていますよ」

丁寧に包装されたお守りを手にする笑顔の木庭さん。そのカエルが奏でるホルンの音色は、きつと、やさしく、そしてあたたかく、子どもたちとこの地域を包み込んでくれるはずですよ。

「結局、私が水窪地域の皆さんに元気をもらっているんです。幸せものです」木庭さんは、カエルたちにそっと語り掛けているかのようでした。





阿多古川ならではの漁法

天竜区内には、天竜川をはじめ、その支流の阿多古川や気田川など豊かな水資源がある。いずれの川も鮎釣りの人気スポットであり、6月初旬の解禁日に釣り人たちが竿を持って列になっている光景は、天竜区の初夏の風物詩だ。友釣りを中心の夏の鮎釣りシーズンが終わると「やな漁」の季節を迎える。やなとは、竹や木などで水をせき止めて、魚を捕る仕掛けのことだ。

11月初旬、阿多古川漁協の坪井さんから一本の電話をもらった。「やな漁が始まったら、連絡してほしい」と夏の初めをお願いしておいたのだ。もう少し早い時期に連絡が来ると思っていたので、こちらもすっかり忘れていた。例年、やな漁は10月から11月がピークと聞いていたが、秋になってから雨が少なかった今年、漁がなかなかできなかったそうだ。「今日は、朝からたくさん鮎が捕れているよ」と坪井さん。昨夜は、まとまった雨が降り、久しぶりに阿多古川は水量が増していた。

阿多古川漁協の目の前にある「やな」に到着したのは、昼過ぎ。雨は上がったが、空はどんより曇っていた。河原への階段を下りて、漁をしている人に声を掛ける。男性は、阿多古川の上流・熊地区に住む鈴木さん。やな漁を始めて3年ほどだという。

「朝6時からやってるんだけど、午前中はよかったです。一度に15も20も網に入って、重くて引き上げるのに苦労したぐらいだ」と鈴木さんは得意顔でいった。その表情がこの日の大

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

昔からのやり方を知る人だからこそ
できる仕事なんだよな。

漁を物語っている。「途中、この道を通りかかった知り合いにあげちゃったからな。200や300は捕れたんじゃないか」と続けた。鈴木さんに話を聞いている間にも、上を走る道端から、数人が声を掛けてきた。「おい、どうだ。たくさん捕れたか」と。その度、鈴木さんはうれしそうに顔でこの日の成果を伝えた。

鮎を愛する名人

やな漁は、秋になると産卵のために川を下る鮎の習性を利用して行う。「川の水が少なくて、鮎は川を下りたくても、下れなかった。昨日の雨で一気に鮎が下がり始めたんだ」と、この日の大漁の理由を教えてくださいました。後になってこの漁場を訪れた阿多古川漁協の組合長・石川さん。「鮎はいつになったら、どこに行けばいいか、ちゃんと知ってるんだよ」という。まるで鮎のスケジュール帳でも確認してきたような話だが、それもまんざら嘘でもない。石川さんは「川を毎日見ているら、鮎がどうしているか分かるようになる」と笑う。阿多古川とともに歩んだ人生は、もうすぐ90年。説得力が違う。驚くことに、今も滑りやすい河原をスイスイと歩くそだ。坪井さんはそんな組合長を「川の歩き方が違う」と表現してくれた。

石川さんは、やな漁の名人でもある。この日は、朝5時半ごろから漁をし、捕った鮎は、20キロメートルも離れた天竜川の下流の産卵場所まで行って放流してきたそだ。その量およそ30キログラム。魚の数に

すると500〜600匹に相当する。ただ漁を楽しむだけでなく、鮎の生態のサイクルにまで配慮した暮らし。ここまでのことができるからこそその「名人」であると、本当に頭が下がる思いがした。

暮らしと伝統

阿多古川のやな漁の面白さは、独特の漁法と道具にある。竹や杭を使って堰を作り、それを泳いで泳いでくるところを「四つ出網」と呼ばれる道具ですくい揚げるのだが、このような漁法は珍しいそだ。同じ「やな」と呼ばれる漁法は全国各地にあるが、やり方は土地土地で異なるのだとか。石川さんの話では、阿多古川のやな漁は、安政年間（1854〜1860年）から行われているという記録もあり、古くから伝わる漁法ようだ。「阿多古川の川幅や淵の形が、このやり方に向いている」と石川さん。話を聞いていると、改めて地域の川を知り尽くした伝統であり、無形文化財のようなものだと興味を引かれた。

そして、鈴木さんの使う道具の「四つ出網」。竹や樫の木を組み合わせて作られた網は、名人・石川さんの手によるもの。「素人じゃ簡単にできない。下手だと魚の重みで網が抜けちゃう。昔のやり方を知っている人だからこそできる仕事」と鈴木さんはいう。軽い竹を使うことも先人の知恵。堰や道具を作るための材料は、地元のものの中にあるものを中心だ。

鮎の食べ方について聞くと「この時期の鮎は、燻して甘露煮にすることが多い」と

鈴木さん。これは保存が利くためだ。昔は、冬期に貴重なタンパク源だったのだろうと予想する。いずれにしても漁も道具も調理法も伝統芸といつてよいだろう。すべてにおいて、昔ながらの知恵や工夫が凝縮されている。

ひと昔前は、20を越えるやながあったという阿多古川も、現在は13箇所まで減った。伝統芸能が担い手不足となっているように、やな漁をする人も年々減少傾向にある。しかしながら、やな漁にまつわる技や手仕事は一つ一つ面白い。そして、それに関わる人たちが、何とんでも魅力的だ。何気なく見てきた川の風景の一部でしかなかった「やな」。この日を境に少し違って見えるようになった。



村を救った竜をまつる

5月5日、子どもの日。

日が暮れ始めた頃、春野町の気田川に、30人ほどの男衆が集まって輪になっていた。今日は、奇祭として知られる犬居地区の「つなん曳き」が行われる日だ。他にはないまつりと聞き、心が弾む。揃いの法被に股引姿の男たちは、その時を今か今かと待っていた。

「さあ、そろそろ出発だ」今年の祭りを取り仕切る男性が声を掛けると、一斉に立ち上がり、河原に用意した竜を威勢良く担ぎ始めた。竹と柳で作られた竜は、朝から集まってその日のうちに作り上げるのが、昔からのやり方。その大きさは、30メートルを超える。力自慢の男衆が集まったとはいえ、簡単に曳けるものではない。

「ヨイそりゃ、ヨイそりゃ！」河原から一気に、300メートルほど離れた犬居の通りまで。男たちは声を掛けながら竜を曳く。この祭りの由来は、その昔、大雨で氾濫した川から竜がこの村の人たちを守ったという言い伝えによる。通りで見守っていたおばあさんがそう教えてくれた。

まちで誕生を祝う

つなん曳きは、初節句を祝う祭りでもある。竜を曳く男たちの頭上には、こいのぼり。ここ数年は、若い衆が減り、子どもの誕生がない年もあるそうだが、今年は2人の子が生まれた。「久しぶりに2人も生まれたっていうんで、みんないつになく燃えてる。あんた、いい時に来たな」。ある人はそう言って笑った。日が沈み、次第に夜の帳が下りてくる。提灯に明かりが灯され、徐々に祭りも熱気を帯びてきた。そして、今年、初節句を迎えた家の前で、竜が一度、止められる。

「ヨイそりゃ、ヨイそりゃ！」竜を担いだ男たちが、猛然と家の玄関に突進していく。入口が今にも壊れてしまいそうな勢いだ。

「ヨイそりゃ、ヨイそりゃ！」男たちは構わず、何度も玄関に向かう。突っ込むという言い方が正しいかもしれない。何とも荒っぽい祝い方だ。玄関で笑顔で待っていた赤ちゃんは、びっくりして大声を上げて泣いた。無理もない。何も知らなければ大人だって驚く。何せ相手は巨大な竜なのだ。

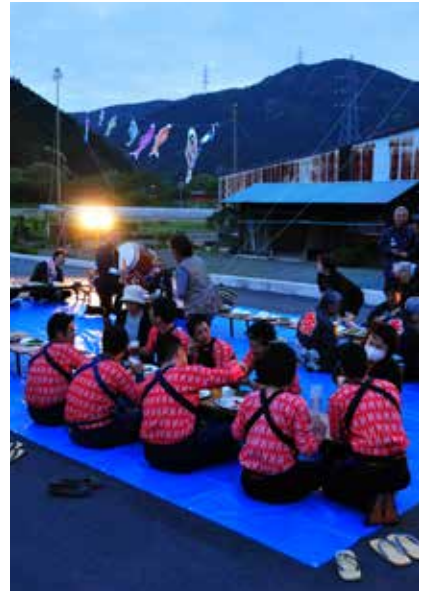
手荒なお祝いが済むと、男衆は集まって万歳を始めた。「おめでとう」の聲が飛び交うと祝福を受けた家族は、深々と頭を下げた。ある人はいく。「だんだん人は減ってきたけど、みんな祭りにだけは帰ってくる。こうやって、自分もまちの人みんなに祝ってもらったって、知ってるからね」。その言葉を聞いて、何だかうらやましく思った。そして願う。今日、祝ってもらった2人が、いつか威勢良くあの竜を曳く日が来ることを。

「つなん曳き」。噂以上の面白い祭りだ。



Tenryu + Plus

今年は初節句の子が2人。
みんな、いつになく燃えてる。





お母さんたちの優しさ

今でこそ「エコ」という言葉が一般的になっているが、この団体は、20年以上も前から「エコ」を冠した名前で活動を続けている。その名も「エコビュア佐久間」。佐久間町浦川地区で環境保全やリサイクル活動などを地道に実践してきたお母さんたちの会だ。

その取り組みは、一言でいうと「生ごみのリサイクル」。地域から排出される生ごみを回収し、これを堆肥化。その後、堆肥を使って野菜を栽培し、各家庭で消費するというものだ。この行程を繰り返し続けて20年。活動のきっかけを「子どもたちが育つ環境のために、お母さんたち、の目線で何かできないかなって思ったんですよ」と話してくれたのは、会の代表・金森さんだ。金森さんの話には「子どもたち」や「小学生」という言葉が何度も登場する。「地に生命、子どもたちに未来を」というキャッチコピーを掲げているエコビュア佐久間。結成時から現在に至るまで、地元の子どもたちを豊かな環境の中で育てたいというお母さんの温かい気持ちは変わらない。

今回、このエコビュア佐久間に竹の堆肥化を依頼した。70代のお母さんたちが中心の団体であることから、無理を承知でお願いしたつもりだったが、結果的には二つ返事で引き受けてもらった。金森さんがいう「新しいことにチャレンジすることが楽しみ」という言葉。とてもありがたかった。人はいくつになっても挑戦する、そうした気持ちを忘れてはいけないということも教えてもらった気がした。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

太陽や風、雨や土。
自然の中で生きることができる幸せ。

子どもたちへの眼差し

以前は、毎週月曜日に地域内およそ30軒を回り、生ごみを回収していた。その量は、1回あたり150キログラムにもなった。これは年間に換算するとおよそ7トンにも及ぶ。「ごみの回収業者さんから、この地域はごみが少ないね、といわれるのがうれしかった」と金森さんは笑顔で話す。会員が高齢化してきたため、車での回収は数年前からできなくなったが、今では各家庭から直接、団体で管理する農園まで生ごみを持ち込まれ、堆肥にするためのコンポストと呼ばれる容器に投入される。

生ごみを分解するのに必要な「ボカシあえ」も手作り。これは、もみ殻や発酵液などを混ぜて作られる。最近では、自家処理する家庭も増えてきており、ボカシがほしいという声を受け配布もしている。「ボカシがなくなると困るっていわれるから、なかなかやめられないね」と金森さんは苦笑いした。誰かに頼まれると断れない、優しい人柄なのだ。

こうした金森さんたちの活動を地元の子どもたちが見学に訪れることもしばしば。「正しい処理をすれば、生ごみの臭いも出ない」と金森さんはいう。子どもたちは、コンポストの蓋を開けて「臭くない」と、まず驚くそう。そして、自分の家から出たごみが土に戻ることに2度目の驚き。「その反応が、とても素直でうれしい」と金森さんは優しく笑った。

今年も、職場体験で農場を訪れた地元の女子中学生がいたそう。その女の子が

ね、将来、おいしい野菜を作りたいからここに来たっていうんです。そういわれた時、私、本当にうれしくてね」と金森さん。「生ごみを埋めたり、土をいじったり、そんなことを若い子がやってくれたんですよ」と目を潤ませながら続けた。この話は、長年の活動が一つの実を結んだ結果なんだろうと思った。しっかりと着実に「子どもたちの未来」につながっているのだ。

自然に感謝、人に感謝

堆肥を使って育てた野菜は、本当によく育つという。農園はオーナー制になっているが「ここで作った野菜はおいしい」と評判だ。金森さんの言葉を借りれば「自然の力で育てているから、野菜本来の味がする」ということなのだろう。金森さんは「太陽や風、時には雨。土を触りながら生ざられることって幸せだな、って私は常に思っているんです」とも話してくれた。自然への感謝する姿勢を忘れることはない。続けて金森さんは人への感謝も口にした。「ここで仕事をしているとたくさんの方が寄って来て、声を掛けてくれる。手を止めさせて悪いね、なんて、みんないうけど、そんなことはないんです。こちらは、体も心も休ませてもらうってるといつもありがたく思っているんです」。世の中、そんな風に考える人はばかりではない。多くの人が足を運ぶ理由は、その人柄があつてこそなのだと感じた。

私たちがお願いした竹の堆肥づくりも、

いろいろと試行錯誤を重ねながら、順調に進めてくれた。竹は繊維が強いので、コンポストを使うのではなく、直接、畑の土に混ぜ込み、冬の間、時間をかけて堆肥となるように待つそう。4月になったら、元気なジャガイモが出てくるはずですよ」と金森さん。マルチシートが張られた畑を見回しながら「元気で大きくなってね」と声を掛けた。その一言が、とても自然で、温かい気持ちになった。野菜が大きくなるためには、太陽や土だけでなく、きつと作り手の優しさが大切な栄養素の一つになっている。

4月になったら、金森さんの笑顔に会いに行こう。今から、新しい春が来るのが待ち遠しくて仕方がない。





何でもやる人たち

阿多古川環境保全協議会は、天竜区を代表する市民団体の一つである。平成16年の設立当初は、その名のとおり、地元の財産である清流・阿多古川の環境美化のため、パトロールや啓発活動などを中心に取り組んでいた。阿多古川が、環境省の「平成の名水百選」にも選ばれたことは、こうした住民の活動が実を結んだものである。

しかし、現在の協議会は、単なる河川美化の推進団体と呼ぶだけでは、少し物足りない。ある時は河川パトロールをし、またある時は、地元の小学校のために垣根を直す。ある時は、海岸まで行って中田島砂丘の保全に協力し、またある時は、放置竹林から切り出してきた竹で門松を作る。さて、その実態は…。「この団体はすごい。人も道具も術も全部揃ってる」とは、ある会員から出た言葉。まさにこの一言が、この団体の強みである。今回は、さまざまな取り組みを実践する阿多古川環境保全協議会の活動の中から、団体の強みを最大限に活かし、他地域との継続的な交流活動に発展した「砂丘の保全事業」について紹介したい。

課題解決から交流へ

10月25日、浜松市南区の中田島砂丘で、毎年恒例となる「堆砂垣設置プロジェクト」が行われた。南区の住民や学生たちなど参加者およそ500人の中に混じって、天竜区の阿多古川環境保全協議会のメンバーの姿があった。

このプロジェクトは、日本三大砂丘にも数え

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

この会はすごい。
人も道具も術も全部揃ってる。

られる中田島砂丘の侵食を防ぐために南区の地元自治会などが始めたものだ。堆砂垣の作製のために必要な竹の確保に奔走していた南区の人たち。川沿いの環境整備のために伐採した竹の活用方法が課題だった阿多古川環境保全協議会が、数年前に材料として竹を提供したことで交流は始まった。当初は、材料のみ提供だったが、今では竹を編み上げたすだれを作って現地まで届け、現地での堆砂垣の設置作業にも協力。今回の作業には、地元の下阿多古小学校の児童4人も参加した。

田舎の人たちの生活力と手仕事の質

堆砂垣の肝となるすだれは155枚。作業は、3月に竹を切り出すところから始まり、製作にはおよそ半月を費やしたそうだ。竹を決められた長さに切って、6つ割りに8つ割りにし、節や枝をはらって、最後に針金で編んでいく。協議会の和田会長が「自分たちでなければできない仕事」と胸を張るとおり、確かに手間がかかる代物だ。竹を加工する技、藪から運ぶ労力、鉋や鋸などの道具、複数人で編み上げる連携。出来上がった成果品だけを見ても、この会の人たちの生活力や手仕事の質の高さをうかがい知ることができる。

阿多古川環境保全協議会が竹のすだれを提供する以前は、市販のアシのすだれが堆砂垣づくりに使われてきたが、竹製は耐久性が圧倒的に優れているそうだ。長い年月、

風雨にさらされながら、砂を受け止め続ける堆砂垣にとって、耐久性はとても重要。実際に、耐久性は3倍ほど。和田さんは「竹製のすだれはすごく丈夫。南区の皆さんから、これからもずっと頼まれ続けるよね」と笑いながらも「自分たちにとっても余った竹の活用は大きな課題。お互いに有効に使えることは良いこと」と話してくれた。

スコップで黙々と砂を掘り続けていた小学生たちに話を聞くと「砂を深く掘るのが難しい。人のために何かをするって大変だなと思った」との感想。よく聞くと、初めて中田島砂丘を訪れた子どもたちばかりだった。同じ浜松市といっても、天竜区と南区は、距離にして30キロメートル以上も離れている。普段、山に囲まれた場所に住む子どもたちにとっては貴重な体験になっただろう。作業がひと段落すると砂浜に寝転んでみたり、走り回ったりと、非日常のロケーションを存分に楽しんでいる彼らの様子を見ながら、そう思った。

山の誇り

堆砂垣づくりにには、道具の使い方や、材料を固定する手作業の上手さに加え、チームワークが求められる。この日の設置プロジェクトは、いくつかのグループに分かれて行われていたが、阿多古川環境保全協議会のグループは、他のグループよりも作業スピードが速い。これはいうまでもなく、日常の手作業や共同作業に手馴れているせいだろう。それでいて出来栄も見事。メ

ンバーの河合さんは「こだわる人が多いですね」と笑って話してくれたが、少しでも固定が甘いところや、ずれているところがあると「ちよつと、そこを直すか」との声が聞かれる。きっちりとした仕事をしなければ気持ちが悪いのだろう。

見事な堆砂垣が完成し、この日の締めくくり協議会の皆さんと、一緒に設置作業をした南区役所職員のボランティアの皆さんが記念撮影。雲ひとつない秋晴れが、作業を終えた皆さんの清々しい気持ちを代弁しているようだった。遠く天竜区から出向き、他人事ではないとばかりに、真剣にやりとげる姿を見ているだけで誇らしい。山間部は、都市部に助けられるだけの存在ではないということも、きっちり証明してくれた一日だった。お父さんたち、格好いい。



仕事のスタイル

12月10日、朝8時。

20人ほどの仕事人が集まった。

ヤッケに帽子、兼帯に地下足袋は、このまちで働く男たちのスタンダードスタイルとっていい。各人の好みでヤッケの色使いが変わるくらいだ。彼らの今日のミッションは、直径15センチはあろう孟宗竹を竹やぶから切り出すこと。竹は、門松を作るために使われる。

竹林に入った男たち。ある者は、けたたましいチェーンソーの音を立て、またある者は鉈や鋸を振り、野太い獲物を仕留めにかかる。前日のうちにまっすぐな竹には目印をつけた。「曲がったようなヤツじゃ、いい門松にはならない」と仕事人の一人はいった。作るからには出来にこだわる。次第に先ほどまで暗かったやぶに、光が差し込んできた。

門松づくりは、容易ではない。

松、竹、梅。今ではなかなか手に入らず、揃えるのにひと苦労だ。竹だけはそこらじゅうで余っているが、やぶから持ち出すまでが大変な作業だ。仕事人たちは70代が中心。「そろそろ若い衆らに手渡さなきゃいかん」と口にする人もいる。しかし、作業する姿は現役そのもの。肩に重い竹を担いで歩く背中には、何ともいえない説得力がある。

品のある仕事

12月19日、この日も朝8時。

天竜区役所の玄関前で、門松を建てる作業が始まった。高さ2メートルを超える門松づくりは、毎年恒例のもの。これは全て仕事人たちの善意によるものだ。この日は、区役所のほかにも、小学校や中学校、警察署などの玄関が、仕事人の手によって、一足早く正月の装いに一変した。

作業は、実に手際が良い。そして、ここでも出来栄えにこだわる。きちりとした仕事が彼らの信条だ。「今年は、センリョウが見事だな」と一人がいうと「こりゃあいい。あるのとないのじゃ全然違う」とみんなが口を揃える。わずかな差し色だが、その分量も品良く、何度か刺しては抜きと調整された。竹を縛った縁起物の海老結びが正面を向き、一对の門松が見事完成した。

「これで無事、正月が来るよ」とは、作業を終えて出たひと言だ。

仕事人たちは「阿多古川環境保全協議会」の面々。

誰かのために汗を流すことをいとわない、お手本のような人たち。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

曲がったような竹じゃ、
話にならない。



竹取物語の今。

A story of Tenryu + plus

天ぷら物語 あとがきにかえて

その姿をファインダー越しに捉えながら、知らず知らずのうちに、
国語の授業を思い出す。たぶんあれは中学1年の頃。
先生にいわれてみんなで一生懸命暗記した、物語の冒頭部分だ。

—今は昔 竹取の翁といふものありけり。

野山にまじりて、竹をとりつつ、萬のことにつかひけり。

竹やぶで鉦を振り、仕事する人たち。

平安の世と現代が、竹を取る姿とともに重なり合う。

おそらく、この文章が千年の時を越えて読まれることはないが、
ここに収めた暮らしは、1000年後も変わらず在り続けるのではないだろうか。
そんな風に思わずにはいられない。

もちろん、ここに収められた物語に「かぐや姫」は登場しない。

しかし、私たちのまちが進むべき道を照らす光源が、

竹とともにある暮らしの中にあると信じたい。

そして今は、夜空に浮かぶ星のごとく、淡く、かすかな光ではあるけれど、
いつか、満月のように光り輝くことを願う。

月に向かって宣言しよう。

私たちは、この一筋の光明を「てんりゅうプラス」と呼び、
大切に、大切に育てることにしたい。

「暮らしが見える。感じる^{ぬくもり}体温」。

てんりゅうプラス。

このまちの「竹取物語」は、てんりゅうプラスなストーリー。



暮らしが見える。感じる^{ぬくもり}体温。

Tenryu + Plus